

トロント大学図書館研修報告

すずき ゆき
鈴木 有紀

(湘南藤沢メディアセンター)

1 はじめに

2015年10月から2016年2月までの5か月間、カナダのトロント大学図書館¹⁾(以下、UTL)にて研修の機会を得た。本研修はUTLと慶應義塾大学メディアセンター(以下、慶應)との交換研修協定に基づくもので、慶應からの派遣は4年振りである。日本より急速な電子資料の増加に直面しているUTLの様々な取り組みについて直接見聞きすることができ、充実した研修期間を過ごすことができた。

2 研修の目的・概要

トロント大学はカナダ最大の州立大学で、北米研究図書館協会(以下、ARL)の2015年のランキングではハーバード大学、イエール大学、コロンビア大学に続く第4位である²⁾。学内に44館あるという図書館のうち、筆者は主にメインのセント・ジョージ・キャンパスにある人文社会学系のロバーツ図書館で研修させていただいた。

研修の目的として、大学図書館界を取り巻く状況の変化、特に蔵書構築や、冊子体資料に関わる伝統的な利用者サービスの分野における状況の変化にUTLがどう対応しているのかを学ぶことで、将来の蔵書構築のあり方について、特に利用者サービスの観点から考える契機としたいと考えた。具体的には、派遣当時慶應で担当していた閲覧・ILL業務を担当するアクセス・アンド・インフォメーションサービス部門の他、収書(冊子・電子共)や整理を行うコレクション・ディベロップメント部門にそれぞれ席を頂いた。これらを拠点として、ロバーツ図書館や学内の他の図書館への訪問、上記2部門内外の図書館員へのインタビュー、部内会議への参加、業務体験の他、図書館内で実施された様々なイベントへの参加を通じて、テクニカルサービス・パブリックサービスの両面から図書館サービス全体の理解に努めた。

3 キーワード1: Assessment

研修を通じて見えてきたUTLの方向性を表すキーワードの1つとして、“Assessment”がある。

図書予算額は、電子資料の価格高騰等を大学当局に訴えた結果、この数年で4~5%ずつ増額されているが、筆者が滞在した2015年は米ドルに対してカナダドル安が進み、資料の大部分を米ドル払いにしているUTLにとって大変厳しい年であった。予算対策のためのワーキンググループの活動によって、為替レート変動対策用の予算項目を別に設けることに成功し、これまでは大幅なタイトルカットを免れている。しかし並行して、選書担当者が分担して高額パッケージの本格的な見直しを行うため、他の契約との重複や利用度の他、インパクトファクター、査読の有無などを丹念に調べていた。当時、同じカナダ国内のモンリオール大学やニューファンドランド・メモリアル大学などでいわゆるビッグ・ディール契約中止の動きがあり、UTLでも大変話題になった。UTLのような大規模大学ではタイトル単位での契約は現実的ではないとはいえ、この数年が正念場と考えていた。

利用者サービスの評価については、2007年度から3年毎にARLのLibQUAL+[®]を継続的に実施しており、筆者が滞在中の2016年にも4回目の調査を行っていた³⁾。今回は回答率を上げるために、学生に対しては質問項目の少ないLibQUAL+[®] Liteを採用している。この調査を継続する意義として、他の多くの図書館でも実施されており同じ基準で比較ができること、また経年変化が確認できることを挙げていた。一方、その独特な回答方法が利用者に理解されにくく、別の利用者調査をすべきとの意見も聞かれた。

利用者サービスについて既に行われている興味深い取り組みとしては、2015年5月に行った図書館Webサイトのリニューアル時に、アクセスログの解析やユーザーによる実験を行ったほか、リニューアル途中で試験公開を行って利用者のフィードバック

クを聞くというもの、また館内の構造が複雑なロバーツ図書館の館内サインが見難いのではないかということから、利用者の動線を観察し、入館してから目的地までどのようなルートでたどり着くか調査するというプロジェクトがあった。

なお、UTLでは2013年から5年間の戦略プランを定めているが、筆者の滞在中にはこれについても中間評価を行っていた。策定以降の状況変化に合わせて改訂されたものが公開されている⁴⁾。

このような様々な取り組みを行うため、UTLでは従来の枠組みにとらわれない、部署横断的な仕事をする新しい職種が増えており、筆者の滞在中も頻繁に新規採用や募集が行われていたのには驚いた。例えば、“Assessment”に関しては、Assessment Librarian, User Experience Librarianといった人たちが活躍し始めている。人材が豊富であるからこそ可能な取り組みとも言えるが、何事も調査・評価を行い、根拠を元に行動しようとする姿勢には学ぶところがあった。

4 キーワード2 : Collaboration

UTLの方向性を表すもう1つのキーワードは“Collaboration”である。

UTLはカナダ最大の大学図書館であり、多くの図書館員から「私たちはいつもカナダ全体のことを考えなければならない」とか「UTLの蔵書はナショナルコレクション、ナショナルトレジャーのようなものだ」といった発言が度々聞かれたのが印象的だった。そのような立場から、他大学図書館との様々なコラボレーションをリードしている。

まず、カナダのオンタリオ州にある大学図書館21館が加盟するコンソーシアムであるOCUL (Ontario Council of University Libraries)、カナダのナショナルコンソーシアムであるCRKN (Canadian Research Knowledge Network) において、それぞれ重要な役割を果たしている。但し、費用や人員に関する負担も大きく、規模の異なる大学図書館との協同関係については苦労の声も聞かれた。そこで、コンソーシアム以外にも様々なコラボレーションを模索している。

目録においては、カナダの5大大学図書館や国立図書館と協同して、Canadian Linked Data Initiativeと呼ばれるプロジェクトに参加している。

UTLの担当者は、MARC形式の目録データを他のデータとリンクさせる識別子の検討グループに入っており、様々な実験を重ねながら検討を始めたところである。

そして、冊子体資料の保存に関しても、UTLの外部保存書庫を活用した新たな取り組みがある。UTLでは基本的に図書の除籍を行わず、図書館の書架から溢れる資料はロバーツ図書館から北へ15キロ離れたダウンズビューという地域にある保存書庫に送っている。2005年に第1棟を建設、ちょうど2015年秋に第2棟が完成したばかりで、毎週5,000冊ペースで配架作業が進められていた。合計で500万冊収容可能であるが、更に隣接地に800万冊分収容の書庫を建設可能な土地を保有している。



図1 ダウンズビューの保存書庫内

ダウンズビューでの保存対象は、10年間貸出のない図書や電子化した雑誌、大学のアーカイブ資料などが中心だが、それ以外に新着図書でも利用が極端に少ないと思われる資料は最初からこの保存書庫に送付してしまうというのがUTLならではの。分野ごとの具体的な基準は選書担当者の方針で決められるが、更に各図書館の書庫事情やリノベーションの予定などに応じて優先順位を決めるなど、細かい調整がなされているようだった。

そして今、オンタリオ州内にある他の4大学との間でこの書庫の共同使用を検討中である。共通の送

付基準は、ダウンズビュー内の重複は認めず、これまで通り利用の少ない図書を送付する、という2点のみで後は各大学の判断に任される。土地はUTLの所有であるため、今後の書架建設や運用にかかるコストを5大学でシェアする予定である。メリットとして、蔵書数が多く所蔵範囲も広いUTLが既に多くの資料を送付しているため、他の4大学にとっては自館の蔵書を重複除籍できること、一方UTLにとっては、今後の書架建設や運用にかかるコストの負担を軽くすることができる。但し、各大学が異なる図書館システムを使っていることから、所蔵情報をどう共有するかが最大の課題である。

なお、OCULにおいては図書館システムの共同利用も検討されているが、規模の大きいUTLは既にこの構想から外れている。UTLは現在SirsiDymix社の統合図書館システムSymphonyの他、多数のシステムを運用しており、業務の重複、システム間のデータ交換の負担、総合的なデータ分析ができないといった問題がある。この解消を目的として、2017年末を目途に次の図書館システムをLibrary Services Platformの製品群の中から選定する方向で検討を始めている。ちょうどProQuest社のExLibris買収から間がなく動向が読めない中ではあったが、活発な議論が大変興味深かった。

5 利用者サービスのその他の動向

現在のロバーツ図書館は1973年に建設されたものだが、閲覧席不足の解消を目的とした初めての増築を行う。元々2004年頃から構想があり、2010年頃に一旦デザインを決めたものの資金不足で一旦計画を中断。その後2013年に改めて予算に合わせてドイツの設計事務所が設計し直し、漸く実現に至ったことである。増設部分はRobarts Commonと呼ばれる5階建てで、位置は既存の建物の西側、現在の2階と通路で繋げる。書架は一切置かず、閲覧席は現在比で25%増加しロバーツ図書館全体で約6,000席となるほか、グループ学習室、プレゼンテーションルームを合計32部屋設ける予定である。現在のロバーツ図書館は開講期間中、週に5日間は一部の閲覧席を24時間開放しているが、このRobarts Common完成後はこの建物のみを夜間開館とする代わりに、夜間開館を全ての曜日に拡大するかもしれないと担当者は話していた。但し、現在の建物の2

階にしかないカフェテリアへのアクセスも課題である。本稿執筆時点の情報では2017年に工事を開始し、2019年完成予定となっている⁵⁾。



図2 Robarts Common完成予想図⁶⁾

※奥が既存のロバーツ図書館、手前のガラス張りの建物がRobarts Commonである。

ILLにおいては、学内者が他館から取寄せを行う場合、以前から無料であった現物貸借に加え、数年前から複写についても無料化した。依頼館との間の連絡は、OCLCのArticle Exchange経由でやり取りすることが主流になり、利用者には論文のPDFファイルのダウンロード先をメールで通知している。それでも依頼数は減少に転じていることから、利用者の利便性を高めることを目的として、教職員と大学院生を対象に、所蔵する雑誌論文をスキャンして提供する取り組みを試験的に開始したところである。

なお、日本への依頼については、OCLC経由か国立国会図書館、逆に日本からの受付についてはメールでも一定量届いている様子であった。日本語資料が必要な場合でも、UTLから日本へ依頼することは少なく、主に北米内で賄えている。日本や慶應に望むことを尋ねたところ「OCLCでの提供館が増えること、そしてOCLCへの所蔵登録が増えることに尽きる」との答えだった。

コースリザーブシステムは2015年にアップグレードしたばかりである。図書館が教員からシラバスと参考文献のリストを受け取り、図書の場合は現物を指定の書架に配架するほか、雑誌論文、Webサイトへのリンクなどをシステムに登録し、紙の雑誌論文の場合は図書館でスキャンしたPDFファイルをアップロードする。特徴的なのは、公開前に著作権法上の問題がないか、図書館内にある著作権専門の

オフィスと協力して全てチェックを行っている点である。(カナダの著作権法では、冊子全体の10%あるいは1章のうち多い方がスキャンの上限となる)なお、この著作権専門のオフィスは2013年に始まったもので、現在はMOOC(大規模公開オンライン講座)への配信や出版、映画上映、デジタル化といった学内の様々な教育・研究活動における著作権問題のサポートを行っている。

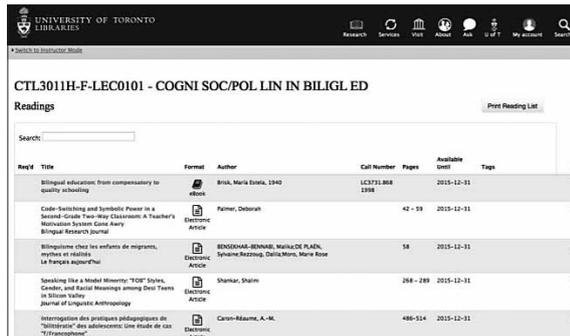


図3 コースリザーブシステム画面⁷⁾

6 まとめ

建設計画中のRobarts Commonの他、比較的最近リノベーションした他の図書館を見ても、UTL全体として、館内の便利なところに使い易い学習・研究スペースを提供する一方、資料については電子媒体やダウンロードの書庫からの取寄せを含め、何らかの方法でアクセスを確保しておく、というのが全体の傾向のように見えた。レファレンスは対面の相談は減少し、新入生へのサポートとして2013年に開始したPersonal Librarianプログラム⁸⁾、数多くのセミナーやイベントのほか、オンラインレファレンスやパスファインダーの整備に力を入れている。

コンソーシアムで資料を購入し、冊子体は共同保存し、その目録データを他館やWeb上の他のサービスとリンクする。外部との“Collaboration”を進めているからこそ、翻って自館の“Assessment”を行い、存在意義や独自性を検討することが重要視されていると感じた。様々なニーズに対応できるサービスチャンネルを用意するには、新しい職種の図書館員の雇用、複数のポストの掛け持ちや部署横断的に動く図書館員の存在といった人事・組織上の動きは効果的である。

チーフライブラリアンのLarry Alford氏に今後力を入れたいことを伺ったところ、特に自然科学分野

において注目される研究データ管理、豊富な蔵書数を誇る貴重書の広報活動や様々なデジタル化のプロジェクトを挙げていた。それぞれ興味深い取り組みが行われており今後の動向を注視したい。

一方、慶應について最も興味を持たれたことは意外にも人事異動の存在であった。UTLというより北米の慣習と思われるが、雇用は組合によって厚く保護され、職務内容は予め契約で定められている。空きの出たポストに学内から本人が希望して応募することはあるが、そうでない限り他の部門の仕事を体験する機会はない。この仕組みは業務の専門性を極めることに繋がる一方、UTLでは特に伝統的な図書館サービスに関わる職員の高齢化が進む中、業務ノウハウの継承が大きな問題となっている。(転職して新たな職種に就く人も多く、例えば前の大学でレファレンス担当だった人がUTLで目録担当となり、本人は総合的なスキルアップを図っているが、引き継ぎがなくUTL内での独自のノウハウが継承されない)UTLから慶應へはこれまで4人の方が研修にいらしているが、今回の研修のテーマとして、人事異動を前提とした業務共有の仕組みを学んでは、というアイデアも出ていた。ただ、UTLで複数の所属や肩書を持つ図書館員が少しずつ増えていることは、この問題解消に役立つと思われる。これは特定主題の担当者が選書とレファレンスの両方を担うといったことに留まらず、音楽図書館の担当者が週の半分はコレクション・ディベロップメント部門で選書のみならずマネジメントも行う、あるいはレファレンス担当者が情報システム部門でWebサービスの開発に関わるなどの例があり、我々にとっても興味深い。

なお、滞在中に慶應の紹介や研修計画・成果について2度のプレゼンテーションを行った他、インタビューの際には慶應や日本の現状を伝えるよう努めたが、慶應、また日本の活動についての更なる情報発信の必要性を痛感する場面も多かった。電子資料の増加に伴うコレクション・サービス両面の変革、図書館内外のコミュニティとの連携など、直面する課題には共通するものが多く、今後、研修を超えて何らかの“Collaboration”ができることを期待する。

最後に、5か月もの長期にわたり私を受け入れ、親身にご対応くださったUTLの皆様、そして快く研修に送り出してくれた同僚に心より感謝申し上げます。

る。帰国後、湘南藤沢メディアセンターの分室である看護医療学図書室に異動し、奇しくもパブリックサービス・テクニカルサービスを横断的に見る機会を得た。UTLで出会ったマルチプレイヤーの図書館員たちを参考に、新しい職務に邁進したい。

注

- 1) University of Toronto Libraries.
<https://onesearch.library.utoronto.ca/>
(accessed 2016-11-13)
- 2) Association for Research Libraries. "ARL Library Investment index 2014-15 - Rank Order Table". ARL Statistics.
<http://www.arlstatistics.org/documents/ARLStats/index15.xls> (accessed 2016-11-13)
- 3) University of Toronto Libraries. "LibQUAL Survey 2016".
<https://onesearch.library.utoronto.ca/libqual-survey-2016>
(accessed 2016-11-13)
- 4) University of Toronto Libraries. "Charting our Future: 2016 update: University of Toronto Libraries' Strategic Plan 2013-2018".
https://onesearch.library.utoronto.ca/sites/default/files/strategic_planning/UTL-Strategic-Plan-2013-18.pdf
(accessed 2016-11-13)
- 5) University of Toronto Libraries. "Robarts Common".
<https://onesearch.library.utoronto.ca/sites/default/files/robarts-common.jpg> (accessed 2016-11-13)
- 6) University of Toronto Libraries. "Robarts Common".
<https://onesearch.library.utoronto.ca/robarts-common>
(accessed 2016-11-13)
- 7) University of Toronto Libraries. "Getting to know the expanded Library Course Reserves module".
https://onesearch.library.utoronto.ca/sites/default/files/copyright/Library%20Course%20Reserves_what%20is%20it_FACULTY.pdf (accessed 2016-11-13)
- 8) University of Toronto Libraries. "Personal Librarian".
<https://personal.library.utoronto.ca/index.php/>
(accessed 2016-11-13)